■先づ良田を耕す

社会は百芸に通じた人間よりも一芸に秀でた人間を必要としてゐます。然るに学校は、どんなに一学科に秀でてゐてもこれを不可とし、総ての学科に精通する事を要求してゐます。これが「学校は子供の個性を潰す所である」と言はれる所以です。

二宮尊徳翁は「先づ良田を耕せ」と教へています。荒地を耕した事では翁の右に出る者はゐないでせう。その翁が「先づ良田から耕せ。耕し終ってなほ余力があったら、その時は荒地を耕すが良い。余力の無いのに、又は初めから荒地を耕すのは愚かである」と教へたのです。

良田は楽に耕せて然も収穫が多いのです。労少なくして効が多いのです。かういふ労働は張合いがあるので働くのが楽しくなります。だから益々耕作に励み、自然と富農になるものです。所が、荒地は耕すのが困難で然も収穫が少ないですから、労多くして効少なしです。これでは労働の楽しさが得られず、終には働く意欲を失って、愈々貧しくなって行きます。

学業もこれと全く同じです。成績の良い科目は言はば良田なのです。僅かの学習で容易に立派な成績が得られ、学習が益々楽しくなります。だから益々学習して益々賢くなるのです。所が、成績の悪い科目は荒地のやうなもので、努力して学習してもなかなか成績が向上せず、その学習はいつも苦しいものです。

それなのに学校の教師は「成績の良い科目は放って置いて、その分悪い科目に力を入れなさい」と言って、不得意な科目に精を出させてゐます。だから、多くの子供たちが学習意欲を失って、終には学校嫌ひになるのです。総ての学科に精通する事はいくら努力しても必ず出来るといふものでは無いですし、又世の中においてはそれ程望ましい事でもありません。世の進歩発展に貢献した人の多くは、万能の人よりもむしろ唯一つの道を突き進んだ人であります。論語にも「君子は多ならんや」とあります。今の学校教育は多才の小人を作る事を目指してゐる訳です。